

地域と協同の

2017年2月25日発行

150号

研究センターNEWS

巻頭言

「対話で答えを創り出す」

安藤 信雄

中部学院大学・経営学部（教授）コープぎふ、理事

最近つくづく感じていることは、問題に対する「答え」は、教わるものではなく創るものではないかということである。

大学院修士課程で協同組合の研究をしていた当時、私には協同組合が営利企業に勝る確固たる「理論」を見つけることができなかった。南北問題や環境問題へ協同組合に答えとしての違和感を感じるようになり、博士課程は中小企業協同組合の研究を選択した。そこで近代経済学の数学的分析手法の習得に没頭していると、今度は、近代経済学の利益最大化仮説そのものに違和感を感じるようになった。その理由は、新古典派理論の世界では、手段であったはずの利益をなぜ目的とするのかについて「答え」がなかったからだ。

大学で「まちづくり論」という講義を担当し、各務原市のまちづくり活動助成金審査委員会委員長として市の職員やNPOの活動家と「まちづくり」について議論をしてきた。JAめぐみのさんから農業者所得倍増のための共同研究の依頼をいただき、学生と白川町、東白川村での調査も行ってきた。コープぎふから有識者理事の機会を頂いている。

その中で、いくつもの答を探さねばならなかった。自発的市民活動を促すには？、農業者所得を倍増させるには？、生協らしさとは何か？。先行研究から教わる答には常に違和感が付きまとう。

些細な出来事に「答え」探しのヒントを感じた。半月ほど前、JAめぐみの職員の方と懇談で、生協と協働してはどうかと提案してみた。すると「生協さんは、労力のかかる有機農法を求めるとは価格は見合わない」と返事が返ってきた。過日、日本生協連・全国産直研究交流会へ参加すると、そこでは、生協が農家を守り育成しようという機運が盛り上がり事例が沢山紹介された。生協と農協の目線の擦れ違いを感じた。

他人から教わる答には常に違和感が付きまとう。目の前の課題に対する「答え」に正解がないのであれば、答えを皆で議論し創っていくことで課題を克服していくしかなさそうだ。

(あんどう のぶお)

CONTENTS

巻頭言「対話で答えを創り出す」	1
安藤 信雄	
第13回東海交流フォーラム「概要報告」	2
2月11日／ウインクあいち	
地域で、「地域と協同」を語り合って15年・・・	4
八木 憲一郎	
●情報クリップ	5
■企画案内	8
■書籍案内	

地域と協同の研究センター 2月の活動

- 2月3日(金) 協同の未来塾第11回「修了式」
- 2月7日(火) 生協の未来のあり方研究会第61回
- 2月11日(土) 第13回東海交流フォーラム
- 2月13日(月) 三河地域懇談会・世話人会
- 2月15日(水) 岐阜地域懇談会・世話人会
- 2月17日(金) 研究フォーラム「職員」公開学習
- 2月18日(土) 政策提言会合
- 2月21日(火) 三重地域懇談会・三重のつどい
- 2月22日(水) 研究フォーラム「環境」世話人会
- 2月23日(木) 常任理事会
- 2月24日(金) 研究フォーラム「地域福祉」世話人会
- 2月26日(日) 共同購入マイスター⑦・修了回
- 2月27日(月) 生協の(未来の)あり方研究会第62回
- 2月28日(火) 国際協同組合デー記念行事準備会

<第13回東海交流フォーラム開催報告>

「よいよい“らし”をつくる 地域のつながい！」

～個の力から生まれる地域の未来～

2月11日（土）に第13回東海交流フォーラムを名古屋駅前ウインクあいちに於いて、110名の参加で開催しました。今回はその内容の一部をご紹介します。また、当日のアンケートでは「穴に埋没した人を引き上げるには、ここに注目したいと思った。」「若いのにすごいバイタリティにびっくり。人の話を聞くことの大切さに気づきました。」「子ども食堂のお話は、これからますます増えてほしいと思った。子どもの未来のためにも広がって欲しいです。」「それぞれの方が、自分達にできる事は何か？考え実行されていることがすごいと思いました。」などの声がありました。（文責：事務局 大島）

講演：「ひとりの小さな一歩を大切にしあえる社会とは

～誰もがありのままを認められる暮らしの中で～

講師：渡辺 ゆりか 氏（一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト代表理事=写真）

「一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト」は、平成23年4月23日に発足しました。地域や社会から排除されて、孤立している人、人のつながりや役立ちから遠ざけられてしまっている人を、制度があってもなくても、かけつけて応援するという団体です。最初はボランティア団体から始めた団体ですが、子どもの貧困、社会的孤立が日本でも社会問題になっていて、名古屋市から助成をいただいたり、自主事業を展開したりと活動しています。

私達も最初は、勉強会から発足しました。困りごとがある人は、重複した困難を抱えているので、一人の専門家が一人を応援しても解決にならない。みんなで横串を差して、つながってこうという勉強会がありました。それに感銘を受け、孤立している人は、私達の周りにもいて、支援や制度、助けの手が届かず、暗い穴の中にいて、孤立に苦しんでいる人を、「穴の中にいる人」と呼んでいます。そういう方がどうしてそうなるのか、どうするとそういう方々と出会え、手をつなげるのか、そういうことを考える勉強会を始めました。

私達草の根ささえあいプロジェクトは、この穴にいる人に対して、「わかっているけど仕方ない」と言わない社会にするにはどうしたらいいかということからスタートしています。近所に引きこもりの子がいるみたいだけど、相談してもらえないし、「わかっているけど仕方ないよね」とか、高齢者福祉サービスの事業を展開していて、介助が必要だけど、まだその年齢でもないし、「困っているのはわかっているけど、仕方ないよね」とか、そういうことで私達は穴にいる人を、もっと穴の奥に追いやっているのではないかと思います。その方々に、みんなで力を合わせてできることを持ち寄り、どうしたらよいか考えるところからスタートします。

穴にいる人も、実際、孤立したことがある、誰も信じられなくなって自殺も考えたことがあるという人や、そんな人を応援している支援者の人に、どう

して
うな
たのか、
50事
例くら
い聞き
取りを
しまし
た。そ
もそも

孤立して暗い穴の中にいる人は、もって生まれた生きづらさを個人特性として持っています。それは、例えば精神障がいであるとか、個人でどうしようもないものを抱えているということがわかりました。そしてプラス、環境特性として、多くの方がご家庭の事情、DVの家庭であるとか、虐待を受けていたとか、お母さんがめんどろをみてくれなかったとか、そういった事情を抱えていて、そもそも生きづらい事情があります。ただそういうことはわかりづらく、例えば障がいを持っていて、車イスを利用しているとか目に見える困り事はわかりやすいのですが、目に見えないことはわかりにくいのです。さらに、見えないので、できないことも、怠けている様に見え、責めてしまいます。例えば親から虐待を受けていたり、勉強にむかないという特性を持っていたりすると、普通の人と同じように就労するのは難しいですが、まわりの人はそれを求めてしまいます。どうしてがんばらないの、なぜ怠けているの、なぜ空気が読めないのと責めてしまいます。そういう方々は、家庭でも、学校でも、地域でも、会社でもステップごとのライフステージで、他人から誤解をうけるという辛さを味わっています。そうすると多くの方は人に理解されないことを苦にして、怒りや不信感が自分の中にたまり、トラブルをより起こすようになり、ますます人から遠ざけられるというループを繰り返すことがわかりました。もう一つのループは、人



に理解されない、自己責任にさせられるということで、自分にあたり、自信をなくして、引きこもって、社会に出るのが怖くなってしまおうという方々がここに該当するのではないかと思います。

そもそもご家庭に複数の課題がある方は、家族ごと孤立するという現象が見られるということがわかりました。そして人に非難されるということを繰り返して、人に対する不信感を募らせ、「人とかかわるのはよそう」とあきらめてしまう瞬間があることもわかりました。私達はその狭間に、暗喩(メタファ)の「孤立の川」を流しています。この川を越えてしまうと、人が社会とつながる力を失い、より人を遠ざけ、いよいよあきらめてしまうと自死に至る、あるいは誰にも見つからないまま孤立死に至ることがわかりました。私達はこの「孤立の川」を越えそうなくらい苦しんでいる人、「孤立の川」を越えてしまったけど、戻りたいと思っている人を応援しています。そういう方がどんどん増えているということは、日本の社会のデータでも見られることです。引きこもっている方の多くは、「SNEP」と呼ばれています。ニートにソリタリー(孤立)を足したものが「SNEP」です。孤立というのは定義を設けていて、二日以上家族以外の人と口をきいたことがないという人です。そういう方が今日本では162万人いるということです。さらに「完全SNEP」という家族とすら口をきかないという人が急増しているということです。

報告①「太陽の家子ども食堂～きみを、あなたを、ひとりにしない。～」

報告者 対馬 あさみ 氏(NPO法人「太陽の家」代表)

三重県桑名市

私も、いろんな方にたすけていただいて立ち直りました。私の子ども時代に、そういう場所があったら違っただろう。もうちょっと早くそういうところとつながって、自分が生きていてもいい、自分が誰かの役に立つ、話をきいてもらえる、たすけてと言っていていい、そんな場所があったらよかったと切実に思って、そういう場所を立ち上げようと思い「太陽の家」を立ち上げました。

報告②「24時間介護の取組と、その仕事を通じて変わる職員の意識」

報告者 斎藤 啓治 氏(NPO法人「ひなたぼっこ」理事長)

岐阜県中津川市

重度障害者のひとり暮らしの支援をはじめました。豊かな楽しいことをやってあげようがんばっています。例えば、朝になればカーテンを開けて、外が見えるように顔を向けたり、窓の外にメジロがくる

ようにしたり、その方の立場にたってやってあげたいことを考え出す活動をしています。

報告③「誰かに会える どこかにつながる!～コープ高蔵寺ニュータウン店と私達の地域活動～」

報告者 浜田 弘子 氏 高山 典子 氏 澤井 靖子 氏(春日井市地域福祉を考える会) 下里 玉美 氏(地域と協同の研究センター尾張地域懇談会)

愛知県春日井市

高蔵寺ニュータウン店は去年の3月に、25周年を迎えました。私達はそのお店の施設を利用しているいろいろな場をつくっています。例えば高齢者のたまり場である美老(みろ)の会は、2003年頃「春日井の街って暮らしやすいかな?」をテーマに考え、出てきた声が気軽にしゃべりやすい場が欲しいということでサロンを開きました。

報告④「1. 三河地域懇談会のこの3年間の取り組み “地域で粋な老い支度を”

2. 新城市作手地区で、“まずは寄らまいかん”を共同で開催」

報告者 田所 登代子 氏 前澤 このみ 氏(地域と協同の研究センター三河地域懇談会)

愛知県三河地域

“寄らまいかん”というのは三河の方言で“集まりましょう”というような軽い呼びかけです。それを廃校になった小学校の多目的施設を使って開きました。主催はJA愛知東とコープあいちです。そして、協力してくれたところが、新城保険センター、社会福祉協議会(虹の郷)、作手総合支所、JA愛知東女性部作手支部、カプリス(フルーツとピアノの演奏グループ)がありました。

以上の報告の後、「分散会への話題提供」が前田健喜氏(一般社団法人JC総研)からあり、その後10のグループに分かれて講演や報告を聞いて感じたことを交流しました。分散会の後、各グループから代表で感想を紹介し合い、みんなで元気を分け合い、閉会しました。



<会場の様子>

地域で、「地域と協同」を語り合って15年・・・

八木 憲一郎（コープあいち顧問）

はじめに

「地域と協同の研究センター（以下研究センター）」が設立されて22年、NPO法人化した2000年から数えて17年になる。生協が参加する「くらし・地域・協同」をテーマにした研究所が各地で設立される中で、「研究センター」とする意味を議論した頃のことが懐かしく思い出される。同時に、三河地域の会員が一堂に集い、地域と協同を語り合うようになって15年、ということも思い出した。この10年・20年を振り返ることは、今は昔の物語かもしれない。しかし、人類誕生以来続いてきた協同の営みから見れば、一瞬の出来事にすぎない。明日の「地域と協同」を考えるために、ぼやけつつある私の記憶の糸を手繰ってみようと思う。

研究センター発足の頃、

東海の生協で・・・

80年代の後半から90年代前半にかけて、東海3県の5生協（現在3生協）では県域を越えた連帯構想が論議され、実践が始まっていた。一つは組合員の連帯であり、一つは事業の連帯だった。組合員の連帯は、平和・くらしを守る運動の連帯であり、自立した組合員が活動する地域（生協）の連帯であり、それぞれの生協（組合員）の主権に関わる問題でもあった。このような組合員の連帯は容易ではなかったが、事業の連帯は東海コープ事業連合が設立され、その基盤ができた。そんな時期に、生協の狭い枠を超えた研究組織づくりが検討された。「東海コープグループ」として期待しめざしていたことは、「役職員の教育事業」と「組合員によるくらしの商品学研究事業」の2つだった。「職員の教育」といっても事業経営・組織運営に関わる実務教育ではなく、協同組合運動を支える人づくりのための「生協学校」というイメージが強かった。今では「理事ゼミナール、共同購入事業マイスターコース、協同の未来塾」などが実現しているが、当時の思いからいえば、更なる充実・強化を期待したいものだ。もう一つの「くらしの商品学」は、アプローチが難しいこともあって、いまだに検討できていない。しかし、食の分野を中心にくらしの安全・安心をめざす生協には、協同の力で生み出される食の商品研究は重要だ。次の中期目標では、「生協の（未来の）あり方研究」や「も

のづくり研究」のテーマの一つとして検討したいものだ。

三河の地域で・・・

研究センターは、くらし・地域・協同を考える幅広い事業に取り組み、組織も活動もたくましく成長してきた。ところで、研究センター設立の頃のこと。「私たちの生協活動には象牙の塔は似合わない（必要ない）」という組合員の声をよく聞いた。私は、研究センターのイメージを「自立した会員一人ひとりが協同して、調査研究し、学び交流しながら、まわりに広げる活動を行う場」と説明していた。現在の研究センターは、このイメージをはるかに超える活動が、広く深く実践されている。そんな今だからこそ、会員自身ももっともっと主体的に参加し、もっともっと地域に会員を増やすことが大切だ。かつて、生協の理事を退任すると退会する人が多いと聞き、残念に思った。「名古屋までは遠いから…」という声もあった。そんな時、「いつでも、いつまでも、自分たちのくらし地域で、地域と協同のことを考える会員同士のつながりを持ち続けたい」という会員の願いに応えられる研究センターでありたい、会員仲間でありたい、と話し合ったものだ。今では、そんな場として、地域懇談会実行委員会の活動がある。

三河地域では、2002年に研究センター（中央）と会員（地域）の意見交換会が開かれ、2003年の地域フォーラムや交流会、2005年の「三河地域懇談会」へ発展してきた。2013年の第10回三河地域懇談会を一つの区切りにして「3カ年計画」を立て、「くらし・介護」をテーマに幅広い学習・見学・交流を重ねてきた。この4月8日には、「粋な老い支度」の集大成企画として「豊橋生協会館に寄らまいかん（「集まりませんか」の奥三河弁）」を開催することになった。どんな新企画になるのか、当事者の一人である私も楽しみだ。この15年を踏み台に、地域と協同を考え行動する輪を広げながら次の3カ年計画を相談するところまできたように感じている。

そこで皆さま、桜吹雪に誘われて、

三河の地・豊橋までおいでん！！

（やぎ けんいちろう）

情報 クリップ



メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 半 定価/頒価
<p>▶子育て世代に 生協の魅力を多角的に アピール</p> <hr/> <p>NAVI 2017. 2 No. 779</p> <p>日本生活協同組合連合会</p>	<p>特集 子育て世代に生協の魅力を多角的にアピール <コープのある風景> コープしが <こんにちは！生協男子ですっ！> おかやま市民生協 大橋 治紀さん <元気な店舗の取り組みを学ぶ> 生協ひろしま コープ安東 <宅配・現場レポート> コープこうべ コープみらい コープあいち <生協大好きママ コプ山さんの 教えて！CO・OP 商品> CO・OP まんまるねぎとろ丼 <熊本地震復興支援情報> <想いをかたちにコープ商品> CO・OP スペシャルブレンドコーヒー <私の本ナビ> コープぎふ <エッセイ>東京⇄パース 小島慶子の8,000キロ通信 空からひとりごと <日本全国ふだんのくらしを支えたい> コープぎふ <明日のくらし ささえあうCO・OP 共済> ユーコープ <この人に聴きたい> 地震学者・慶應義塾大学 准教授 大木 聖子さん <ほっとnavi> コープ東北サンネット事業連合 日本生協連</p>	<p>2017 年 2 月 A4 版 36 頁 360 円</p>
<p>▶安心して暮らし続け られる地域社会を目指 して</p> <hr/> <p>生協運営資料 2017. 1 No. 293</p> <p>日本生活協同組合連合会</p>	<p>【巻頭インタビュー】 ●わが生協、かくありたい！ 人づくりを掲げ、多様な文化が共存する 地域に根付いた事業と組織の構築を目指す コープみえ ●理事長 西川幸城氏</p> <p>【特集】 安心して暮らし続けられる地域社会を目指して</p> <ol style="list-style-type: none"> 生活困窮者支援の意義を伝えることから始まり 地域での役割を發揮する生活相談・貸付事業 みやぎ生協 ●執行役員 生活文化部部長 兼 くらしの安心サポート部部長 小澤義春氏 くらしの安心サポート部 ぐらしと家計の相談室室長渡 邊淳氏 組合員の自発的な運営を生協がサポート 共感と感謝とともに広がる「おたがいさま」 地域つながりセンター●代表 高橋玲子氏/事務局長 野津久美子氏 コープおたがいさま いずも●代表 福場由紀子氏 生協しまね●理事長 安井光夫氏/副理事長 石原淳子氏 学識理事 田中義昭氏 コープかがわ●理事長 木村 誠氏 生協組織アドバイザー●毛利敬典氏 「お店で買い物に不自由する人を手助けしたい」 組合員の思いを実現したショッピングリハビリ コープこうべ●第5地区活動本部 本部長 牧 圭介氏 震災を契機に広がりを見せる熊本の生協運動 生協くまもと●代表理事 理事長 兼 熊本県生協連●会長理事 吉永 章氏 <p>【連載】 ●これからの店舗事業のあり方を考える 第5回 直営のデリカセンターを開設したコープえひめ 経営感覚を磨き、総菜部門の黒字化を目指す コープえひめ●常任理事 店舗事業部 統括部長 石丸耕介氏 店舗事業部 惣菜バイヤー 藤原雅典氏</p>	<p>2017 年 1 月 B5 版 100 頁 定価870円 (送料別)</p>

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 半型 紙張・頁数
	<p>●全国生協の宅配事業・宅配センター運営を学ぶ 第17回 ドミノ・ピザ ジャパンに学ぶ 若年層の安全運転意識を高める教育施策 (株)ドミノ・ピザ ジャパン ●Domino's University シニアスペシャリスト 高井龍哉氏</p> <p>【特別企画】 グローバル企業となるために、創業の理念を掲げ 世代や障がい、国境を超えた人づくりを目指す サントリーホールディングス(株) ●執行役員 人事本部長 神田秀樹氏</p>	
<p>▶国民理解の醸成に向けた JAグループ広報の役割 ～多様な広報手段の活用</p> <hr/> <p>月刊 J A</p> <p>2017. 2 vol. 744</p> <p>全国農業協同組合中央会</p>	<p>特集 国民理解の醸成に向けた J Aグループ広報の役割 ～多様な広報手段の活用 J A全中広報部</p> <p>J Aグループ広報の情報発信強化～多様な広報手段の活用</p> <p>組織改革でメディアの信頼を得る ～ J A広報大賞受賞 J Aに学ぶ 尾関謙一郎 (明治学院大学特命教授 メディアと広報研究所主宰)</p> <p>ネットの力を J A広報に生かす 頃末 敬 ((株) ワロップ放送局代表取締役社長)</p> <p>オピニオンリーダーに聞く 牛窪 恵 きずな春秋 ―協同のこころ― 童門冬二 桂川三郷契約</p> <p>J Aトップインタビュー 10年後を見通した水田農業確立へ 村木秀雄 (北海道 J Aいわみざわ 代表理事組合長)</p> <p>展望 J Aの進むべき道 全職員による情勢・危機感共有が急務 比嘉政浩 (J A全中専務理事)</p> <p>海外だより [D.C.通信] 連載 69 天皇誕生日祝賀レセプションでの国産農畜産物 P R 中村岳志 平成 27 年度 J A経営マスターコース優秀論文紹介 農林中央金庫理事長賞 都市型 J Aの勝ち抜き戦略 土屋賢治 / J A横浜 (神奈川県) ブラジル・コチア産業組合中央会記念賞 「食」と「農」を通じて地域社会を豊かに 中島悠太 / J A東京あおば (東京都)</p>	<p>2017 年 2 月 A4版 48 頁 年間予約 5,109 円 (送料・ 消費税込)</p>
<p>▶高等教育機会の 格差と課題を考える</p> <hr/> <p>生活協同組合研究</p> <p>2017. 2 Vol. 493</p> <p>公益財団法人 生協総合研究所</p>	<p>■巻頭言 ベトナムの大学の「特別プログラム」 吉田元夫</p> <p>▶特集 高等教育機会の格差と課題を考える</p> <p>奨学金のポリティカル・エコノミー 金子元久 高等教育機会の格差の実情と課題 ―進路選択と家庭の教育費負担― 小林雅之 大学と職業のあいだ ―良好な「接続」は回復できるか― 児美川孝一郎 大学等中退者への支援を中退理由から考える ―労働市場への移行の観点から― 堀有喜衣 格差と貧困を助長する奨学金制度を考える 大内裕和 コラム 1 「奨学金被害」の実態と救済への道 岩重佳治 コラム 2 金融リテラシーが不足している ―奨学金制度のしくみを知らない学生― 加藤梨里 コラム 3 学生生活実態調査に見る奨学金受給と学生生活 全国大学生生活協同組合連合会</p> <p>■時々再録 日本記者クラブ アウン・サン・スー・チー氏会見 白水 忠隆</p> <p>■本誌特集を読んで (2016・12) 篠田 裕次・松浦 均</p> <p>■新刊紹介 トーマス・H・ダベンポート、ジュリア・カービー (著) 山田 美明 (訳) 『AI時代の勝者と敗者』 星野浩美</p>	<p>2017 年 2 月 72頁 B5版</p>

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 半 定価 発行所
▶今後の超高齢・少子社会を複眼的に考える	農協組合長 インタビュー (35) 組合員の組織であることが農協の強み 石部 和美 共同購買事業と協同活動で会員の経営改革に寄与 文化連第 8 次中期事業計画（平成 29 年度～31 年度）に向けて 佐治 実 二木学長の医療時評 (145) 今後の超高齢・少子社会を複眼的に考える －医療・社会保障改革を冷静に見通すための前提 二木 立 アメリカの医療制度 (5) メディケイドの拡充と連邦制 高山 一夫 第 29 回厚生連薬局管理者研修講座報告 因幡 浩二 韓国農業の実相－日本との比較を通じて (6) 農業センサスからみた農業構造の変動 品川 優 臨床倫理メディーエーション (9) 多様な死の時代－死の質とは 中西 淑美 農村医学は世直し運動！～私の歩んできた道 (23) 農村医学は健康医学・予防医学 小山 和作 第 3 回 LCC 事例発表① 厚生連 LCC 戦略と文化連の機能 佐治 実 秋田県厚生連大型医療機器の保守契約見直し戦略（その 2）高橋 伸行 CT の保守 DB（ZOHO）故障分析と PET/CT の共同利用 中村 光一 平鹿総合病院栄養科の取り組み (5) 伝統料理・行事食 前編 春～秋のお食事 石山 香 地域密着のガス事業者による再エネ事業と電気事業 大平 佳男 第 29 回厚生連医療材料全国共同購入委員会臨床工学部会 in 土浦協同病院 山本 卯・高橋 勇己 第 7 回厚生連医療メディーエーター養成研修会（基礎編）報告 中村 駿一 第 7 回厚生連医療メディーエーター養成研修会（基礎編）に参加して 宮島 雄二 第 4 回厚生連医療メディーエーター実践者スキルアップ研修会報告 依田 恒嘉 第 4 回厚生連医療メディーエーター実践者スキルアップ研修会を受講して 鈴木美加利 岡田玲一郎の間歇言 (140) 病院、施設を支える職員研修 岡田玲一郎 デンマーク&世界の地域居住 (93) オランダの革新④新しい介護保険 Wlz の利用プロセス 松岡 洋子 熱帯の自然誌 (11) 私の暮らし カリマンタンの森にて (1) 安間 繁樹 イギリスの社会的企業 女性のための社会的企業アカウント 3 (3) 小磯 明 ●野の風● 高齢をむかえる HIV 感染者 / 柿沼 章子 ▶線路は続く (107) 山形鉄道 幸せの白うさぎ / 西出 健史 ▶最近見た映画 皆さま、ごきげんよう / 管原 育子	2017 年 2 月 B5 版 80 頁 文化連報 編集部 03-3370-2529 *注
文化連情報 2017. 2 No. 467 日本文化厚生農業協同組合 連合会		

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています（主な内容は目次等から事務局が要約しています）。詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。

企画案内

生物多様性COP10から6年長良川河口堰運用21年

伊勢湾流域再生のシンポジウム VOL2

日 時：2017年3月12日（日） 13:30～16:45

場 所：ウインクあいち1302 名古屋市中村区名駅4丁目4-38 TEL.052-571-6131

昨年1月31日に四日市で第一回シンポジウム当日の伊勢湾流域圏の再生シンポジウムアピールでは「『流域圏という生態系の価値を高めることをベースに置いた統合政策』へと舵を切るダイナミックな転換の動きは未だ始まっていません」と謳われました。生物多様性条約COP10で採択された「愛知目標」の達成期間が残り4年となった今回その目標の達成に向けた日本の「流域圏政策」の課題を確認し、さらに長良川河口堰の最適運用方法、三河湾再生の課題について専門家から具体的に問題提起をいただきながら、議論を進めていきたいと思ひます。

講演1『長良川河口堰最適運用方法の模索—5年間の経験から』伊達 達也（法政大学教授）

講演2『伊勢・三河湾の環境の状況と漁業』磯辺 作（放送大学客員教授）

講演3『「愛知目標」の達成にむけた日本の「環境政策」の課題』吉田 正人（筑波大学教授）

シンポジウム◎パネリスト 伊藤 達也/磯辺 作/吉田 正人 ◎コーディネーター 高山 進

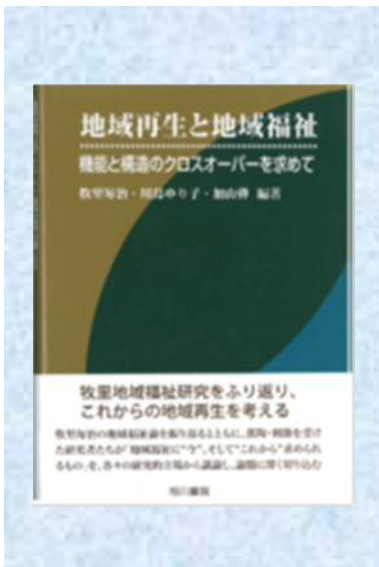
主催：伊勢・三河湾流域ネットワーク 国連生物多様性の10年（UNDB）市民ネットワーク 中部の環境を考える会

四日市ウミガメ保存会 よみがえれ長良川実行委員会

資料代500円／学生無料

お問い合わせ／よみがえれ長良川実行委員会 TEL. 090-1284-1298（武藤）

書籍案内



地域再生と地域福祉—機能と構造のクロスオーバーを求めて

著者：牧里 每治/川島 ゆり子/加山 弾【編著】出版社：相川書房

価格：¥3,456（本体¥3,200）

発行年月：2017/01 サイズ：A5判 308頁

内容：本書は、地域福祉研究の第一人者である牧里每治氏（関西学院大学教授）の退官を記念して出版されたものである。牧里氏に薫陶・刺激を受けてきた研究者たちが、地域福祉の“今”と“これから”に求められるものについてそれぞれの研究的視点・立場から論じている。「第1部 牧里研究を振り返って」「第2部 地域福祉の主体および方法・対象」「第3部 主体・対象の多様化、ネットワークと政策化」「第4部 福祉国家の視点から」という4部構成からなるが、付録の牧里論文・著書のアーカイブスなども、戦後日本の地域福祉・社会福祉研究を振り返る上では貴重な資料である。地域福祉研究者のみならず、実践者にとっても必読の書としてオススメしたい。

執筆 柴田学氏（金城学院大学人間科学部専任講師）よりご紹介

地域と協同の研究センター 3月の活動予定

3月3日(金)組合員理事セミナー⑤

3月6日(月)NEWS編集委員会

3月8日(水)三河地域懇談会・世話人会

3月10日(金)研究フォーラム「食と農」世話人会

3月13日(月)尾張地域懇談会・世話人会

3月17日(金)共同購入マイスターコース企画委員会

3月18日(土)東海交流フォーラム第3回実行委員会

第4回理事会

3月22日(水)常任理事会

組合員理事セミナー世話人会

3月23日(木)くらしを語りあう会

第二期名古屋市立大学「寄付講義」相談会

3月29日(水)協同の未来塾企画委員会

3月30日(木)研究フォーラム「環境」世話人会

2017年2月25日発行（毎月25日発行）

定価200円

（税・送料込み。年会費には購読料が含まれています）

発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター

代表理事 西川 幸城

〒464-0824 名古屋市中村区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>